

半屋外環境（エアマス）の形成と効果に関する考察

序

建物は一般に屋根と壁または柱、それに床でできている。各構成要素ともそれぞれに役割は異なるが、特に屋根と壁は基本的構成要素といえる。これらは外皮として建物の外と中とを明確に区切る役割を果たしているが、明確に区切ったためにかえって問題が生じることもある。

芦原義信は著書「外部空間の設計」^[1]で、内部空間と外部空間との関係性から外部空間の重要性を説いた。氏は建築計画の立場から、外部空間の効果を十分に考慮して設計すると、建築物の周囲の虚の空間をも意味のあるものとして扱うことができることを説明している。

本論では空間を環境の要素として捕え、内部環境と外部環境とを区切る境界構造に着目した。内部環境に生じた問題を解決するために境界条件に適用される手法を考察し、特にピロティや大規模建築物にしばしば現れるアトリウム空間を代表とする半屋外環境（空気の固まりの状態であることからエアマスと呼んでいる）の必然性について検討を加えた。その上で半屋外環境（エアマス）と内部環境、外部環境との関係性や半屋外環境（エアマス）の形状と効果（機能）を検証している。

建築の規模がさらに巨大となり、もはや都市とも呼べるような建築（都市的建築）も出現してきている。本論では都市的建築への半屋外環境（エアマス）の適用の重要性、さらには地球環境を救うべく計画される立体都市での半屋外環境（エアマス）のネットワーク化など今後の都市のあり方にまで踏み込んだ検討を行った。

本論の研究が理想の都市生活を計画する上で何らかの貢献ができることを願っている。

[1] 芦原義信「外部空間の設計」、昭和50年 彰国社刊